

薩摩などは格別の遠國故にや、城下にも猶古風残り、器物も酒の銚子といふものなし、皆錫の德利なり、膳も宗和などいふ膳は一ツも見へず、皆二枚脚の木具なり、扱多くは皆土器類を用ゆ、只京都にて官家交る心地す、其外元服の儀式、婚姻の禮法、甚嚴重にして古法ある事、余南橋谿などが知らざる事のみ多し、其外にも狩の作法、犬追物の式等は、薩摩に残れる事、世の人も知る所也、余彼國に有し時、或町家の好みにより、兼好が徒然草を講せし事ありしに、鷹の鳥の付やうの所にいたり、そらにてはしかとおぼへざりしに、座につらなりしもの大かたは皆覺え居て余に語り聞せ、猶色々委敷法ありとて、鳥の付様の圖を出して示せり、町家の人だに斯のごとし、誠に耻べきこと也、其外近き事は、尙更にて、何事も故實に従ひ、人皆かたく守り居て、假初の事にも等閑にはせず、是は此國四方にきびしく關所を居られて出入易からず、他國の人も入來らず、自然に隔りて繁花の風にも押移されざる故也、近き年はやう／＼に他國の人も往來するやうに成て、器物杯も好事の家には、當世の品を調べ持るも間々あり、又下女はしたなどは、今に丸ぐけの帯なれども、妻娘などは帯は幅廣くなり、髮形ちも漸上方を學ぶ家もあり、

名所

〔日本鹿子十四〕同國〇薩摩中名所之部

奧小島ヲキ いわうが島 向の島

すべて當國は島々多し、かうのみなと、こし鹽など云所有、舊記にのする名所すくなし、奧小島と云は、往古平康頼流されし所といへり、

雜載

〔續日本紀文武〕大寶二年八月丙申朔、薩摩多嶽隔化逆命、於是發兵征討、遂校戶置吏焉、九月戊寅、討薩摩隼人軍士、授勳各有差、

〔續日本紀聖武〕天平二年三月辛卯、太宰府言大隅薩摩兩國百姓、建國以來未曾班田、其所有田、悉是